

しっぽうした え
七宝下絵（あま市七宝町伝来）

<概要>

員 数 一括（113 件）
時 代 明治時代～大正時代

七宝下絵は、七宝製品の制作にあたり、図柄のもとになる図案として描かれた下書きの絵である。

本資料は、あま市七宝町で伝えられてきたものである。内訳は、^{くめの ちゅうさぶろう け} 糸野 忠 三郎家七宝下絵 69 件と、^{いとうつねさぶろう け} 伊藤常三郎家七宝下絵 44 件である。

糸野忠三郎家七宝下絵は、明治時代の中頃に、愛知県海東郡^{おき しまむら}沖ノ島村（現あま市七宝町^{おき の しま}沖之島）の七宝工であった、糸野忠三郎^(※1)の活動時期に使われていたと考えられる。糸野忠三郎は、1881（明治 14）年第 2 回、1890（明治 23）年第 3 回の内国勸業博覧会^(※2)に出品記録が残るほか、1889（明治 22）年のパリ万国博覧会で受章している。本資料の一部には作者の銘が記されており、絵師などが七宝下絵の制作に関与していたことが推測されている。

伊藤常三郎家七宝下絵は、尾張七宝の草創期に海東郡^{とおしま}遠島村（現あま市七宝町遠島）で開窯した^{いとういちざ えもん}伊藤市左衛門の弟、^{いとう ぎ ざ えもん}伊藤儀左衛門を始まりとして、常三郎、^{つねよし}常義の 3 代にわたる七宝窯元で伝えられてきたものである。常三郎は、1881（明治 14）年の第 2 回内国勸業博覧会に出品し、1889（明治 22）年のパリ万国博覧会において受賞している。本資料は、明治時代から大正時代にかけて、常三郎の活動時期に使用されていたと推測され、実際に花瓶などの^{そじ}素地に当てたり、型紙にして写したりして使用した跡のあるものが多い。

本資料は、七宝の制作工程のうち、図柄に関する工程の様子を知ることができる重要な資料である。

(※1) 糸野忠三郎 生年不詳－1909 年没。

(※2) 内国勸業博覧会 1877 年から 1903 年までに、東京で 3 回、京都・大阪で各 1 回、政府主導により国内の産業振興を企図して開催された。

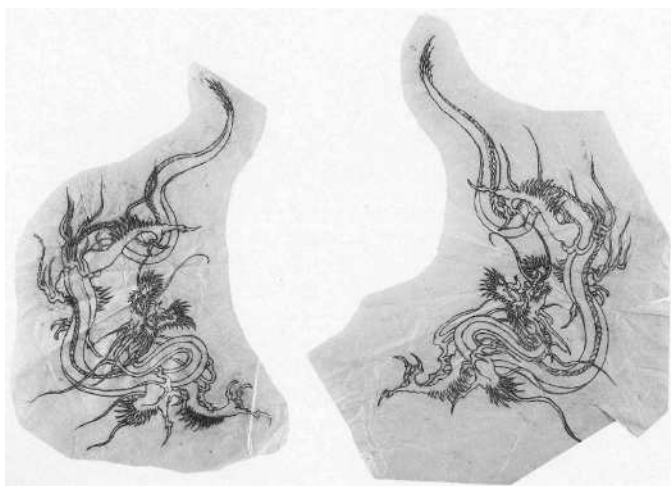
(※3) 伊藤常三郎 1859 年生まれ－1919 年没。七宝窯元の伊藤家は伊藤儀左衛門（生年不詳－1878 年没）、常三郎、常義（1891 年生まれ－1960 年没）の三代にわたる。



七宝下図「牡丹に孔雀のつがい」

(左) 40.6×28.2cm、(右) 40.6×7.2cm

あま市七宝焼アートヴィレッジ収蔵



七宝下図「龍」

(左) 25.5×17.3cm、(右) 29.3×22.5cm

あま市七宝焼アートヴィレッジ収蔵